

資 料

常同行動を示す自閉症者に対する活動スケジュールを使用した余暇支援
—職員への要求行動の形成を通じた余暇活動の維持の検討—

村本 浄司*・園山 繁樹**

本研究では、知的障害者入所更生施設に入所する常同行動を伴う自閉症者1名に対して、活動スケジュールを使用した余暇スキルを形成することによって、常同行動の軽減を試みた。さらに、対象者が職員への要求行動を獲得することによって、入所施設において職員による対象者への余暇支援を維持させることを目的とした。訓練室における余暇スキル形成後、居室においても対象者の余暇スキルを形成することに成功した。さらに、職員との協働の余暇支援実施後、外部支援者のスーパーバイズがなくても、余暇支援を継続できていた。この要因として、職員が手続きを確認しながら、外部支援者と協働して支援を実施できたことが、対象者への余暇支援の維持に貢献した要因であると考えられる。

キー・ワード：自閉症 常同行動 活動スケジュール 余暇支援

I. 問題と目的

自閉症児者の中には、手をひらひらさせる、頭を前後にゆらす、等の常同行動を示す者がいる。常同行動を示す自閉症児者に対して、余暇時間に好みの活動を導入する、あるいは余暇スキルを形成することによって、その行動が減少したことを示した研究が、いくつか報告されている (Meyer, Evans, Wuerch, & Brennan, 1985; Sigafoos, J., Tucker, M., Bushell, H., & Webber, Y., 1997; 渡辺・望月, 1990)。

さらに、常同行動と余暇活動などの望ましい行動との関係は、互いに反比例の関係を示していると考えられる。すなわち、自閉症児者が常同行動を自己刺激行動として表出している場合には、その行動自体から生み出される感覚によって強化されていると推察される。つまり、いわゆる自動強化としての役割を果たすと推測さ

れる常同行動を、同様の役割を果たすような有意義な余暇活動に置き換えることによって、相対的に常同行動を軽減できると推測される。また、自閉症児者に余暇を指導する際に、余暇で使用する物品（以下、余暇アイテム）を配置するだけではなく、余暇アイテムの使用方法や活動スケジュールを取り入れることにより、その効果が高まる可能性がある (McClannahan & Krantz, 1999; Sigafoos, Tucker, Bushell, & Webber, 1997)。

例えば、Sigafoos, Tucker, Bushell, and Webber (1997) は、常同行動を示す知的障害者2名に対して、余暇アイテムを提示する条件と、対象者に対して余暇活動の従事を促すプロンプトをし (Prompt)、遊び方の見本を見せ (Sample)、援助する (Assist) というPSA条件を比較した。その結果、余暇アイテム提示条件では、対象者の常同行動はベースラインと比較してもほとんど変化がないままであった。一方、PSA条件では、余暇アイテムへの従事率がほぼ100%とな

* 茨城県立あすなろの郷

** 筑波大学大学院人間総合科学研究科

り、相対的に常同行動の生起率は0に近い値まで減少した。また、6週間後のフォローアップにおいても、余暇アイテムへの従事率は変わらず、常同行動の生起率は低く維持されていた。

したがって、単に余暇アイテムを提示するだけではなく、実際に遊び方を教えたり、「何をして遊びたいか」を決定するなど余暇活動の選択スキルを形成すること、さらに遊びの選択肢を導入することによって、常同行動などの行動問題の減少効果を高めると考えられる。さらに、自閉症児者への余暇支援の研究において、選択肢や活動スケジュールを導入することにより、自閉症児者の余暇従事が促進されると報告されている (Bambara & Ager, 1992; Bambara & Koger, 1996; McClannahan, & Krantz, 1999)。

一方、入所施設で利用者が余暇活動を実行しようとする際に、他の利用者から物を壊されたり、奪われるといった妨害を受ける可能性も考えられる。また、入所施設は集団生活であることから、利用者が自分で物品を管理することが難しいという側面もある。そのため、余暇アイテムを壊される、あるいは奪われるという事態になると、職員が利用者に余暇支援を実施しようとする動機づけそのものがなくなってしまう可能性も否めない。そのことを予防するために、利用者は施設職員に余暇アイテムを管理してもらう必要性に迫られるかもしれない。すなわち、利用者から職員に対して、余暇活動を行う上で必要な物品を要求する機会を設定し、その機会を保障することが、利用者自身の充実した余暇時間を過ごすということにもつながると考えられる。

本研究の目的は、自動強化によって維持されている常同行動を示す自閉症者1名に対して、スケジュール表を使用した余暇スキルを形成することで、常同行動の減少を試みた。さらに、職員との写真カードによる要求行動の形成することで、施設における余暇の維持を試みた。

Ⅱ. 方 法

1. 対象者

対象者は、重度知的障害を伴う自閉症の26歳の男性Aさんであった。Aさんは知的障害者入所更生施設B園に入所していた。Aさんは積極的に作業に従事しており、普段の生活においても特に目立った行動問題は見られなかった。日常生活においても食事、排泄、入浴、衣服の着脱などはほとんど自立できており、職員による介助の必要性はほとんどなかった。また、常同行動を行うこと以外は、大声を挙げて騒ぎ立てるようなことはめったになかった。療育手帳は重度の判定であった。言語については「たべる」「ほしい」等の要求を示すこともあったが、日常生活の中で自発的に使用することはほとんどなかった。日常の簡単な指示は理解できていた。Aさんの常同行動は、軽い頭たたき、指くわえ、頭揺らしであった。

2. 機能的アセスメント

Aさんの常同行動について、日常的にAさんと関わっている職員から情報を聴取した。その結果、Aさんの常同行動は、何もすることがない時間に表出することが多いということが推測された。また直接観察の結果、Aさんが常同行動を示しても職員や他利用者が関わることはほとんどなく、他者からの社会的な強化によって維持されている可能性は低かった。そのため感覚的な強化子によって維持されている可能性が推測された。

3. アセスメントからの介入方略の決定

Aさんは、余暇時間に好みの活動や物を要求することはいっさいなかった。また、B園内において好みの活動や物を要求できる機会は設定されていなかった。そのため、Aさんが好みの活動に従事するための余暇スキルと、職員に余暇で使用する物品を要求するための要求行動をAさんに対して形成する必要があると考えられた。一方、Aさんの余暇活動では、スケジュールブックを使用することとした。その理由として、持ち運びができるように携帯性を重視したためである。

Aさんが余暇活動を行う際には、スケジュールブックに貼り付けた写真カードを職員に渡すことで、職員から余暇活動の物品を獲得できるように、Aさんに対して写真カードを使った要求行動を余暇スキルと同時に形成することとした。

4. 標的行動の定義

Aさんは頭たたき、指くわえ、頭揺らしなどの常同行動を示していた。Aさんの常同行動の定義を、頭たたきでは「左右のどちらかの手のひらで、側頭部を1回たたく」、指くわえでは「右手の人さし指を、前歯で跡が残るくらい噛む」、頭揺らしでは「頭を前後、または左右に一回往復させる」とした。また、余暇従事の定義を、「余暇アイテムに1秒以上接触する」、「テレビを1秒以上注視する」とした。

5. 好みのアセスメント (X年1月)

好みのアセスメントの実施期間は、X年1月に週に1日、1日につき1セッションを合計3セッション実施した。手続きは単一刺激アセスメント (Single-Stimulus procedure; Pace, Ivancic, Edwards, Iwata, & Page, 1985) に基づいて行われた。アセスメントでは、Aさんに余暇アイテムを1つずつ5分間提示し、「余暇アイテムに1秒以上接触した (手を触れた)」場合にチェックすることによる、10秒インターバル記録法によって測定した。好みのアセスメントの結果、Aさんの好みは、音楽鑑賞 (童謡)、女性雑誌、お絵かき、料理雑誌、レインボウ・スプリング、

乗り物の本であった。

6. 使用物品

スケジュールブックは、A4サイズの2穴ファイルを使用した。ファイルの表紙部分に、タテ×ヨコが2×3cmのマジックテープを縦列に5枚貼り付け、そこに余暇アイテムの写真カードを貼り付けられるようにした。写真カードの裏面にも丸型で1cm×1cmの大きさのマジックテープが貼り付けた。使用した余暇アイテムは、好みのアセスメントの結果から、CDラジカセ、イヤホン、童謡のCD、女性雑誌、スケッチブック、色マジック、料理雑誌、スプリング、乗り物の本とした。また、時間測定のためのキッチンタイマーを使用した。

7. 手続き

(1) 実施期間と設定：本研究におけるそれぞれの手続きと実施機関をTable. 1に記した。

(2) ベースライン (X年11月～X+1年2月)：Aさんの常同行動と余暇従事率のベースライン測定は、普段Aさんがいることが多いリビングルームにおいて、Aさんが何もすることがないような時間帯である15時30分から17時30分の間の内、30分間を10秒間インターバル記録法によって合計9セッション観察した。また、全セッションを通してストップウォッチを使用して、Aさんの余暇従事時間を測定した。

(3) 余暇スキル訓練期 (X+1年3月～X+1年6月)：最初にAさんに対する余暇スキルの形成をB寮内の訓練室において行った。訓練室の

Table 1 Aさんの余暇支援のための手続きの流れ

手続き	実施期間
① ベースライン (リビングルームにおけるAさんの常同行動の生起率と余暇従事率の測定)	X年11月～X+1年2月
② 訓練室における余暇スキル訓練	X+1年3月～X+1年6月
③ 居室での余暇スキル訓練	X+1年6月
④ 職員との協働による余暇支援	X+1年7月～8月
⑤ プローブ	X+1年9月
⑥ 職員との協働の余暇支援 (2)	X+1年9月～10月
⑦ 維持 (2ヵ月後)	X+1年12月

設定は、3×6メートルの広さで、壁に向けて長机と椅子が設置されており、長さ3メートルの長机は1メートルごとにパーティションで区切ってあった。また、訓練室での訓練を達成した後、Aさんの居室において改めて訓練を行った。Aさんの居室は二人部屋となっており、居室の広さは2×6メートルで、それぞれの利用者のために、衣類や私物を収納するロッカーとベッドが備え付けてあった。また、未使用の3段のボックス棚が中央の壁際に置いてあった。居室の奥には、直接中庭へつながる窓があった。

① 訓練前のベースライン測定 (X+1年3月)：Aさんが余暇アイテムの写真カードをスケジュールブックからはがして、第一著者に手渡すことができるかを確かめた。第一著者はAさんにスケジュールブックを提示し、3メートル離れた場所に座った。もし、Aさんが第一著者に写真カードを渡すことができたなら、その写真カードに対応した余暇アイテムを手渡し、Aさんは5分間余暇に従事することができた。Aさんへのプロンプトはいっさい行わなかった。

② 訓練室における余暇スキル訓練 (X+1年3月～X+1年6月)：スケジュールブックに貼りつける写真カードは、第一著者が6枚中4枚をランダムに選択し、「1番は〇〇 (〇〇の部分は余暇活動の名称)」と言いながら、Aさんに写真カードをスケジュールブックの1番上に貼るようにプロンプトした。同様に2番目以降も、第一著者が写真カードをランダムで選択し、第一著者が言った順番に対応した箇所貼るよう指示した。その後、第一著者は3m離れた場所に座り、Aさんが1番目の写真カードを第一著者に手渡すまで待った。第一著者は写真カードを受取ると、「はい、〇〇だね (〇〇は余暇アイテムの名称)、どうぞ」と言いながら、余暇アイテムを手渡した。Aさんは第一著者から余暇アイテムを受取り、5分間余暇に従事することができた。余暇時間の計測は第一著者がタイマーを5分間に設定し、タイマーが鳴ったらタイマーのストップボタンを押すよう

にAさんにプロンプトした。その後、使用した余暇アイテムは再び第一著者に返却すること、次の順番の写真カードを持ってくることをそれぞれAさんにプロンプトした。最後の余暇アイテムを使用し終わった後、余暇アイテムとともにスケジュールブックを第一著者に返却することを、Aさんにプロンプトした。

Aさんに対するプロンプト手続きは、段階的増加型プロンプト・フェイディング (least-to-most prompt and fading: Demchak, 1990) を使用した。例えば、Aさんが10秒遅延しても正反応が生起しなければ、第一著者はAさんの正反応が生起するように言語プロンプトした。それでも正反応が生起しない場合には、指さしプロンプトを行った。また、違う順番である間違っカードを手渡した場合は、Aさんにスケジュールブックの所まで戻り、正しい写真カードを取るよう指さしプロンプトした。指さしプロンプトをしても正反応が見られないときには、Aさんの後ろから身体プロンプトを行った。次のフェイズへ移行するための達成基準は、全下位行動の中で第一著者のプロンプトなしで80%以上において正反応が生起し、それが2セッション連続で達成された場合とした。

③ 対象者の居室における余暇スキル訓練 (X+1年6月)：居室における余暇スキル訓練の手続きは、訓練室における訓練の手続きと変わらなかった。Aさんの居室には余暇活動を行う上で必要な机と椅子がなかったため、使用されていない3段のボックス棚を机の代わりに使用し、椅子は食堂にあるものを借りて使用した。達成基準は訓練室と同様に、2セッション連続で、全下位行動中80%以上、第一著者のプロンプトなしで正反応が生起した場合とした。

④ 観察と記録測定：訓練期におけるAさんの行動観察をDVDカメラによって撮影した。また、Aさんの正反応を「第一著者によるプロンプトなしで標的行動が生起する」と定義した。訓練における正反応率 (%) は、(正反応数/全下位行動の内の試行された数)×100により算出した。

(4) 職員との協働による余暇支援 1 (X+1年7月～X+1年8月) : Aさんが日常的に余暇時間を継続できるように、Aさんの居室で職員と協力して余暇支援を行った。支援に先立って、職員に対してAさんとの写真カードによるコミュニケーションの手続きを口頭で説明、教授した。実際の支援場面では、第一著者が職員に逐一プロンプトしながら余暇支援を行った。職員に教授した内容は、Aさんが写真カードを持ってきたら、対応した余暇アイテムをロッカーから取り出し、「はい、〇〇 (〇〇は余暇アイテムの名称)」と言いながら手渡すことであった。

(5) プロープ (X+1年9月) : ベースラインと同じ方法で、Aさんの常同行動の生起率と余暇従事率の測定を行った。Aさんが日常的に過ごすことが多いリビングルームにおいて、特に日中活動が決められていない15時30分から17時30分の間の30分間を、10秒間インターバル記録法によって合計2セッション観察した。スケジュールブックと余暇アイテムは、Aさんから要求がない限り提示しなかった。

(6) 職員との協働による余暇支援 2 (X+1年9月～X+1年10月) : Aさんへの余暇支援に際して、第一著者は直接支援を行わず、職員単独での支援を依頼した。前回と同様に支援開始前に、余暇支援に関する手続きについて第一著者と職員が確認を行った。実際に余暇支援を実施するにあたって、第一著者は職員及びAさんに対していっさいプロンプトを行わなかった。Aさんとの余暇支援終了後、職員と改めて余暇支援に関するミーティングを行い、良かった点や修正すべき点等のフィードバックを行った。

(7) 職員によるAさんの余暇活動の維持 (X+1年12月) : 職員からの情報によると、Aさんの居室において余暇で使用する物品を管理する場合、他利用者がAさんの居室に許可なく入室し、余暇アイテムを奪ったり壊したりする可能性が推察された。そのため、第一著者は職員に依頼し、リビングルームにある全利用者共通の空いているロッカーの中に余暇アイテムを収納し、他利用者に奪われないように職員がそのロ

ッカーに鍵をかけて管理することとした。

第一著者が施設職員に対して、毎週水曜日と日曜日の15時30分から17時30分の間の30分程度、余暇支援を実施するように依頼した。さらに、職員による余暇支援の実施の手助けとなるように、手続きのマニュアルを作成し、職員がいつでも見られるように職員室に置いておくこととした。Aさんへの余暇支援に関して、第一著者からのプロンプトや職員とのミーティングはいっさい行わなかった。第一著者によるスーパーバイズ終結後、2カ月経過してから、Aさんの余暇活動は継続されているか測定するために、2セッションにわたってAさんの余暇活動の様子を観察した。

8. データの信頼性の測定

常同行動と余暇従事率を測定したデータの中で、全インターバルの約25%について、第一著者および別の1名の大学院生(行動観察のトレーニングを受けた大学院生)があらかじめDVDに記録しておいたVTRを観察し、計算式[一致率 = {一致したインターバル数 / (一致したインターバル数 + 不一致のインターバル数)} × 100]により一致率を算出した。その結果、一致率の平均は91.7%であった。

また、余暇スキル訓練についても、全試行の約28%について測定し、計算式[一致率 = {一致した試行数 / (一致した試行数 + 不一致の試行数)} × 100]により一致率を算出した。その結果、一致率の平均は94.1%であった。

9. 社会的妥当性

余暇支援プログラムに関する社会的妥当性を検討する目的で、本研究に協力してもらった職員6名に対して質問紙調査をX年12月に実施した(Fig. 4参照)。質問紙の内容は質問1が対象者の常同行動は減少したか、質問2が対象者の余暇は充実したかであり、質問3がAさんとの職員の代替行動や関わりは増えたかであった。質問4と5は職員や施設にとってこの介入が実施しやすいものであったかであった。最後の質問6で、今回行った援助プログラムを他の利用者にも使用したいかについて質問した。

Ⅲ. 結 果

1. ベースラインの結果

リビングルームにおけるAさんの常同行動の生起率と余暇従事率の結果をFig. 2に示した。ベースラインにおいて、Aさんの常同行動は、行動インターバル率の約10%から30%の間を変動しており、安定した数値ではなかった。また、Aさんの余暇従事の時間の結果をFig. 3に示した。Aさんは普段から特定の余暇活動を持って

おらず、唯一リビングルームの備え付けてあるテレビを見ることはあるが、長時間それを注視して楽しむといった様子は見られず、Aさんがテレビを見ている時間は、1日あたり合計1分にも満たない時間であった。

2. 訓練期間の結果

訓練期間における、余暇スケジュール訓練でのそれぞれの行動項目の結果をFig. 1に示した。ベースライン（セッション1、2）ではAさんは

自発的発起		言語プロンプト		指さしプロンプト		身体的プロンプト													
		訓練室															居室		
セッション		BL	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
下位行動項目																			
1)1 番の カードを外し第一著者に渡す																			
2) 事物を受取り、余暇を過ごす																			
3) タイマー（5 分）をストップする																			
4) 事物を第一著者に返却する。																			
5) 2 番目のカードを、第一著者に渡す。																			
6) 事物を受取り、余暇を過ごす。																			
7)タイマーをストップする。																			
8) 事物を第一著者に返却する。																			
9) 3 番目のカードを、第一著者に渡す。																			
10) 事物を受取り、余暇を過ごす。																			
11) タイマーをストップする。																			
12) 事物を第一著者に返却する。																			
13) 4 番目のカードを、第一著者に渡す。																			
14) 事物を受取り、余暇を過ごす。																			
15) タイマーをストップする。																			
16) 事物を第一著者に返却する。																			
17)スケジュールを第一著者に返却																			
正反応率（％）		0	0	31.3	43.8	50	68.8	29.4	64.7	76.4	58.8	62.5	52.9	64.7	94.1	88.2	76.5	94.1	100

常同行動を示す自閉症者に対する活動スケジュールを使用した余暇支援

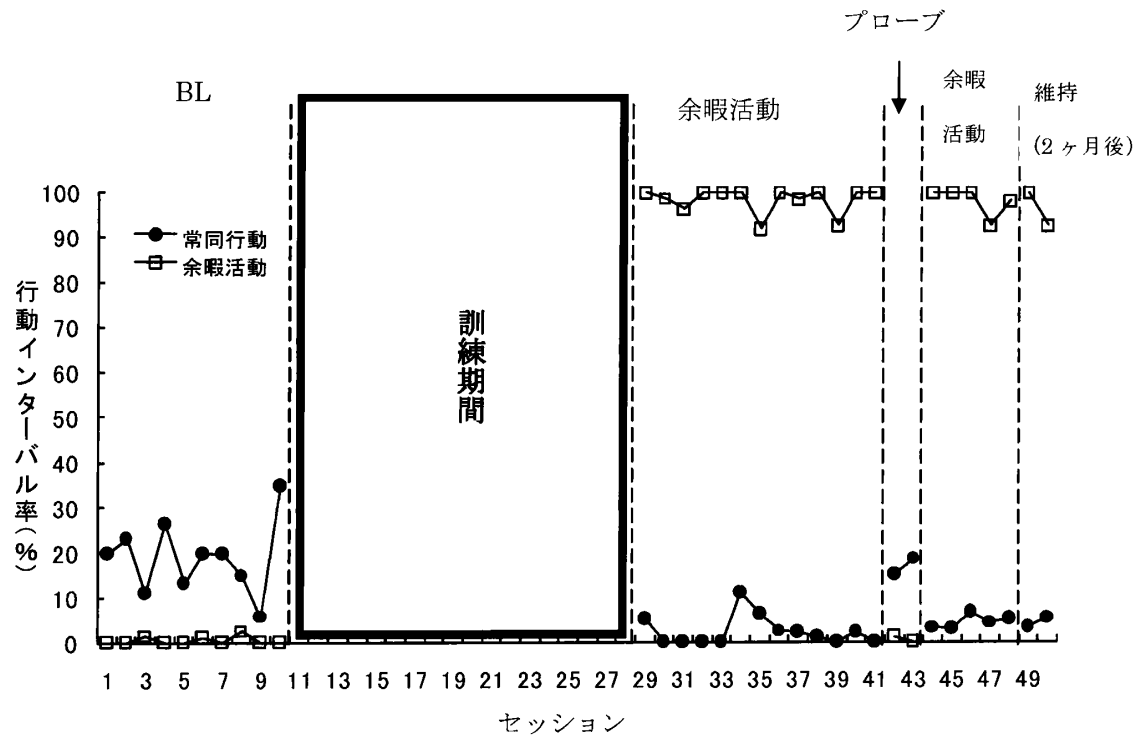


Fig. 2 Aさんの常同行動と余暇従事率の推移

※ 余暇従事率は、10秒間インターバル記録法を使用して30分間測定された。白四角が余暇への従事率を、黒丸が常同行動の生起率をそれぞれ示している。

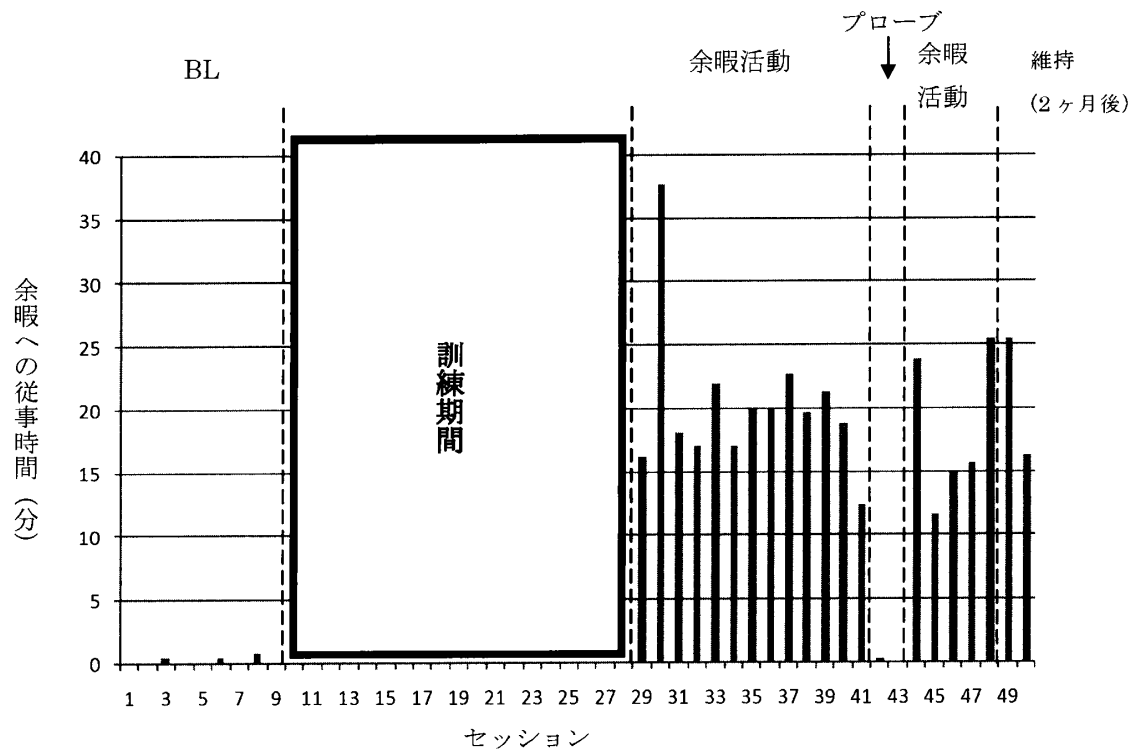


Fig. 3 Aさんの余暇従事時間

※ 余暇従事時間は、直接観察及びDVD記録からの観察により、ストップウォッチによって測定された。

スケジュールブックから、写真カードを手渡すことができなかった。そのため、写真カードを渡さずに第一著者から強引に余暇アイテムを奪おうとしたり、そのため、余暇に従事できずに常同行動を示すことが多かった。すなわち、ベースラインにおけるAさんの正反応率は、両セッションともに0%であった。訓練フェイズに入った最初のセッション3において、最初の試行での「1番目のカードをはがし、第一著者に渡す」という行動項目から、言語プロンプトが必要であったが、指さしプロンプトの使用は1度だけであり、さらに身体プロンプトを使用することはなかった。セッション3の正反応率は31.3%であった。セッション4では行動項目の8番目の「余暇アイテムを第一著者に返却する」において、身体プロンプトが必要であったが、その他の行動項目での言語プロンプトもやや少なくなり、正反応率は43.8%に増加した。その後、セッション5とセッション6においても、徐々に正反応率は増加し、それぞれ50%、68.8%にまで増加し第一著者のプロンプト使用率は徐々に低下していた。しかし、セッション7において、正反応率は29.4%まで大きく低下した。すなわち、Aさんに対してほとんどの試行において言語プロンプトまたは指さしプロンプトを使用するとともに、「2番目のカードを第一著者に渡す」という行動項目では身体プロンプトを使用した。セッション8では、Aさんの正反応率は再び64.7%まで上昇した。さらにセッション8以降は身体プロンプトを使用することは一切なかった。正反応率はセッション9においてさらに76.4%まで増加した。しかし、その後のセッション10からセッション13まで正反応率にあまり変動はなかった。正反応率はセッション14において、94.1%まで上昇した。このセッションにおいて使用したプロンプトは行動項目の「1番目のカードを外し、第一著者に渡す」のみであり、他の行動項目ではいっさいプロンプトはなかった。さらに、セッション15においても正反応率は88.2%であり、このセッションにおいて、達成基準である「2セッション連続

での80%以上」を達成したため、次のフェイズである居室での訓練に移行した。

居室での訓練における最初のセッション16において、Aさんの正反応率はセッション15と比較してやや低下し、76.5%となった。しかし、セッション17で正反応率は94.1%となり、次のセッション18では100%となり、2セッション連続で80%以上を達成し、訓練を終了した。Aさんの正反応を行動項目別で見ると、「カードを外し、第一著者に渡す」、あるいは「事物を第一著者に返却する」が全セッションの中でプロンプトを必要とする割合が高かった。

3. 職員との協働での余暇支援1の結果

職員と協働で余暇支援を行った結果 (Fig. 2 参照)、ベースラインと比べてAさんの常同行動は減少した。セッション29では、常同行動は5.2%の生起率であったが、セッション30から33までは、4セッション連続で0%であった。しかし、常同行動の生起率はセッション34で11.1%まで増加した。セッション35では6.3%に減少し、セッションを経るにつれて徐々に減少していき、セッション39では再び0%になった。常同行動は、セッション40で再び2.2%の生起率を示したが、セッション41で0%となり、プローブに移行した。このフェイズにおける余暇従事率は常に90%以上を維持し続けていた。また、常同行動の生起率が、余暇従事率を逆転し高くなることは一切なかった。また、余暇従事率が高い数値を記録している間は、ほとんどの場合において、常同行動の生起率は低い数値を示していた。セッション29から41までの常同行動の平均生起率は2.4%であった。また、Aさんの余暇従事時間は、ベースラインと比較すると飛躍的に増加した。多くのセッションにおいて、Aさんの余暇活動の時間は15分～20分を記録した。

4. プローブの結果

プローブでは、ベースラインと同じように常同行動の生起率が余暇従事率を上回った。余暇従事率もほとんど0に近い値を記録しており、セッション42、43それぞれ1.1%、0%であっ

常同行動を示す自閉症者に対する活動スケジュールを使用した余暇支援

た。常同行動の生起率は余暇支援のおける生起率を上回っており、セッション42、43それぞれ15%、18.6%の生起率を示していた。余暇従事時間は、ベースラインと変わらないレベルまで減少し、ごくたまにテレビを見ること以外は、Aさんが余暇活動に従事することはほとんどなかった。

5. 職員との協働での余暇支援2

余暇支援を再び開始すると、余暇支援の従事率はすべてのセッションで90%以上を記録した。さらに、セッション44からセッション46はすべて余暇従事率が100%という結果になった。セッション47ではやや余暇従事率が低下し92.5%となったが、セッション48において98%の余暇従事率を記録した。一方、常同行動の生起率もプローブと比べて減少した。多くのセッションにおいて低い生起率を記録しており、セッション44から48までの平均生起率は4.4%であった。Aさんの余暇従事時間は、プローブに比べて再び増加した。本フェイズにおける全てのセッションにおいて15分から25分の間を推移していた。

6. 維持（2ヶ月後）の結果

2セッションとも余暇従事率は90%以上を記録していた。特に、セッション49は100%であった。セッション50ではやや低下し92.5%であった。常同行動は低い生起率を記録していた。

セッション49では3.4%であり、セッション50では少し増加したものの5.4%であった。余暇従事時間は、前のフェイズと比較しても変化はなかった。

7. 施設職員のAさんに対する関わりの変化

ベースライン期と比較して、余暇支援をきっかけとして施設職員からAさんに対して積極的に声かけやスキンシップを図る様子が頻繁に見られるようになった。また、以前はAさんから職員に対してはあまり接近することはなかったが、支援開始以降はAさんの方からも積極的に職員の方に接近するようになった。また、職員の話から「以前はAさんに関わることが難しかったが、カードのやり取りだけでAさんとの関わり方が容易になり、楽しくなった」との感想が得られた。

8. 社会的妥当性の結果

職員に対する社会的妥当性の結果をFig. 4に示した。「Aさんの『頭を叩く』、『指をくわえる』、『頭を揺らす』等の行動は減りましたか」という質問では、とてもそう思う（2人）、そう思う（4人）という結果になり、職員はAさんの常同行動は減少していると、概ね認識しているという結果となった。「Aさんの余暇時間は以前と比べて充実しましたか」では、とてもそう思う（4人）、そう思う（2人）という結果となった。

■ 全くそう思わない □ そう思わない ▨ そう思う □ とてもそう思う

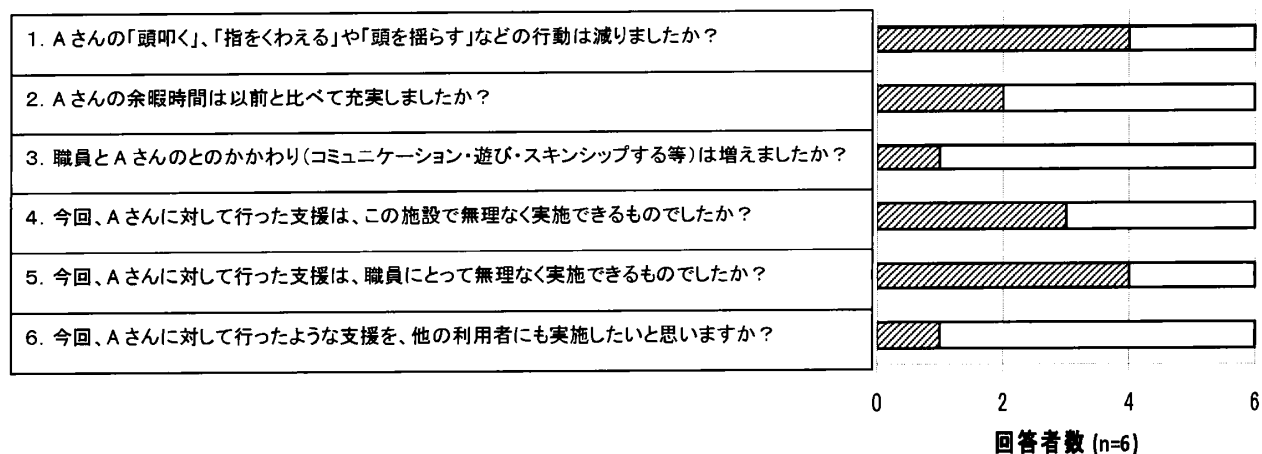


Fig. 4 職員に対するAさんの社会的妥当性に関するアンケート結果

さらに、「職員とAさんとのかわり（コミュニケーション・遊び・スキンシップする等）は増えましたか」では、ほとんどの職員が、とてもそう思う（5人）を選択し、また残りの1人もそう思うという結果であった。「今回、Aさんに対して行った支援は、この施設で無理なく実施できるものでしたか」では、とてもそう思う（3人）、そう思う（3人）となり、「今回、Aさんに対して行った支援は、職員にとって無理なく実施できるものでしたか」では、とてもそう思う（2人）、そう思う（4人）となり、職員および施設ともに今回行った支援は無理なく負担が少ない支援であったという結果であった。最後の「今回、Aさんに対して行ったような支援を、他の利用者にも実施したいと思いますか」では、とてもそう思う（5人）、そう思う（1人）という結果が得られた。

Ⅳ. 考 察

本研究の目的は、自動強化によって維持されている常同行動を示す自閉症者1名に対して、スケジュールによる余暇スキルを形成し、さらに職員との写真カードによるコミュニケーションを通して、施設における余暇の継続を目的とした。本研究開始前、職員が対象者に対して余暇活動を設定することはほとんどなかった。また、対象者は職員に対して余暇活動や余暇アイテムを要求することがなかった。また、対象者自身の余暇も、ごくたまにテレビを見るなどに限定されており、余暇時間が充実しているとはいえなかった。機能的アセスメントの結果、対象者の常同行動は、何もすることがないような余暇時間に頻繁に生起することが多かった。そのため、対象者の常同行動の機能は、その行動を示すことによって感覚的な結果が得られることで強化されていると考えられた。

対象者は余暇スキル訓練開始時、ベースラインでは自発正反応率が0%であり、写真カードを使用して第一著者に要求することができていなかった。そのため、スケジュールブックに貼られた写真を順番通りに操作することができる

かどうかについて、明らかにされていなかった。

活動スケジュールを使用して余暇活動を行う上で必要な行動を課題分析した結果、第一著者によるプロンプトを必要とせず、対象者が自発的に行動を達成できた行動は、「事物を受取り、余暇を過ごす」であった。一方、プロンプトを最も必要とした行動としては、「事物を第一著者に返却する」であった。この行動は、対象者にとって強化的な活動の中断あるいは終結であり、この行動が負の弱化学子として作用したため、対象者にとって嫌悪的になり、第一著者のプロンプトを必要としたと考えられる。しかし、その後のセッションを経過するにつれて、プロンプトは減少し、相対的に対象者の正反応率が増加していった。訓練を実施したのは1週間に1日であったにもかかわらず、15セッション目で2セッション連続の80%以上の達成基準に到達することができた。このことは、写真スケジュールのような視覚的にわかりやすい教材を使用することが、対象者が行動を自発する上で、明確な弁別刺激として作用したものと考えられる。また、訓練室という他の利用者によって妨害されることがない環境で支援を実施することで、行動項目の達成率が高まったと考えられる。また、居室での訓練に移行しても、3セッション以内という比較的早期に行動を達成できた。訓練室と居室は多少物理的環境が異なる部分はあったものの、手続きを一貫して同一に実施できたことが居室へ般化を促進した要因であると考えられる。

次に、対象者に日常的に余暇を継続させる目的で、職員6名と協働して対象者への余暇活動を実施した。その結果、職員全員は手続き通りに実行することができた。このことは、手続き自体が非常に単純で覚えやすいものであったため、職員にとって非常に負担の少ないものとなった可能性が考えられる。

入所施設の職員は配置人数が制限されている、早朝からの勤務や、徹夜での勤務など就労シフトも様々で、さら多忙であるなどの理由で、

1人の利用者への援助に割くための時間が非常に少なく、支援は限られたものになると考えられる。このような条件の中で支援案を考える場合には、職員の負担を軽減し、さらに手続きがわかりやすいものであるということが必須条件となってくる。

本研究では、対象者の日常生活場面において余暇支援を実施する前に、前もって訓練室において対象者に対して余暇スキルを形成し、なおかつ第一著者がコミュニケーション・パートナーとなり、要求行動を形成したその後、職員が手続きを確認しながら、協働して支援を実施したことが、対象者への余暇支援の維持に貢献した要因であると考えられる。

入所施設における余暇支援を行う上で、職員との協働のほかに考慮しなければならないことの1つは、他の利用者との関係に関する問題である。特にその入所施設が自閉症者を中心に構成されている場合、自閉症の特徴の1つである社会的相互作用の質的な障害が問題となる場合がある。自閉症以外の人々が自閉症者と関わる場合、その人が自閉症者の特徴を配慮した上で関わることは可能であるかもしれない。しかし、お互いが自閉症者の場合はお互いの特徴を把握した上で、相互作用を期待することは難しいであろう。

また、感覚過敏性のある自閉症者の場合は、騒がしい他利用者が嫌悪的であったり、他者との接触を避ける場合も考えられるため施設環境への配慮が必要になる。すなわち、本研究で行った対象者に対する余暇支援は、入所施設のような他利用者による妨害によって、その利用者の余暇が妨げられる可能性が考えられる場合に有効であると考えられる。入所施設では、万が一利用者が事故や危険な目に遭う、あるいは利用者が施設から逃亡し行方不明になるなどの問題が生じた場合、施設職員がその責任を追及されるため、職員はやむを得ず利用者を管理せざるを得ない状況にあるといえる。そのような場合には、施設利用者への自由な余暇活動を許可することは職員にとって考えにくい場合もある

だろう。しかし、職員の極端な管理支援が行われることによって、本来中心的に行われるべき余暇支援が形骸化し、施設利用者自身の選択の幅が低下し、QOLが低下する結果となる。本研究では、他の利用者からの破壊や妨害を防ぐために余暇アイテムを職員が管理し、余暇スケジュールの中から対象者が写真カードを選択し、職員に対して写真カードを使用して余暇アイテムを要求することにより、対象者が余暇アイテムを獲得するという方法を実践した。このことは対象者にとっては余暇を楽しむ権利を確保し、なおかつ他利用者による余暇アイテムの破壊行為を防ぐことができ、職員にとっては支援手続きが複雑ではなく持続的に継続可能であるという点で対象者、職員の双方にとってメリットのあるやり方であったといえる。

入所施設内での充実した余暇活動の提供は、本研究のような常同行動を示す対象者だけではなく、強度行動障害を示す利用者にとっても重要な支援要素となる。しかし、本研究では、対象者は常同行動を示す自閉症者1名のみであり、余暇活動が強度行動障害にもたらす効果を実証したといえない。そのため、今後の課題として、強度行動障害を示す人に対する余暇活動の形成に関して、さらなる検討が必要である。

追記

本研究の実施と公表にあたり、Aさんの両親およびB園の施設責任者に対して承諾をいただきました。ご協力いただいた、ご両親、施設長および職員の皆様に深く感謝いたします。

引用文献

- Bambara, L. M. & Ager, C. (1992) Using self-scheduling to promote self-directed leisure activity in home and community settings. *Journal of the Association for Persons with severe handicaps*, 17, 67-76.
- Bambara, L. M., & Koger, F. (1996). Self-scheduling as a choice-making strategy. In D. Browder (Ed.), *Innovations: Opportunities for daily choice making* (pp. 33-41). Washington, DC: American Association on Mental Retardation.

- Demchak, M (1990) Response prompting and fading methods: A review. *American Journal on Mental Retardation*, 94, 603-615.
- McClannahan, L. E. & Krantz, P. J. (1999) Activity schedules for children with autism: Teaching independent behavior. Bethesda MD, Woodbine House.
- Meyer, L. H., Evans, I. M., Wuerch, B. B. & Brennan, J. M. (1985) Monitoring the collateral effects of leisure skill instruction. *Behavior Research and Therapy*, 23, 127-138.
- Pace, G. M. Ivancic, M. T. Edwards, G. L. Iwata, B. A. & Page, T. J. (1985) Assessment of stimulus preference and reinforcer value with profoundly retarded individuals. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 18, 249-255.
- Sigafoos, J., Tucker, M., Bushell, H., & Webber, Y. (1997) A practical strategy to increase participation and reduce challenging behavior during leisure skills programming. *Mental Retardation*, 35, 198-208.
- 渡辺浩志・望月昭 (1990) 施設の中で一人で勉強できる：パソコンを使った自習システムの試み. *行動分析学研究*, 4, 27-37.
- 2010.9.1 受稿、2011.2.14 受理 ——

**Leisure support using an activity schedule for an autistic person with stereotypic behaviors:
Examination of maintenance of leisure activities through shaping of requesting behavior
toward rehabilitation facility staff**

Johji MURAMOTO* and Shigeki SONOYAMA**

This study attempts to reduce the stereotypic behaviors displayed by one subject with autism living in a rehabilitation facility for intellectual disabilities by shaping the subject's leisure skills using an activity schedule. Furthermore, this study describes a way to maintain the leisure support provided by the staff for this subject in an institutional setting by helping him to develop requesting behavior toward the staff. After acquiring leisure skills in the training room, the subject was also able to acquire leisure skills in the living room in his spare time. Furthermore, after instituting the leisure support program in cooperation with the author, the staff were able to continue to provide leisure support without assistance from the author. These findings suggest that a contributing factor to the maintenance of leisure support for the subject is that the staff were capable of supporting the subject in cooperation with the author, based on the adoption of appropriate procedures.

Key words: autism, stereotypic behavior, activity schedules, leisure support

* Rehabilitation facility for people with Intellectual Disabilities, Asunaro-no-Sato

** Graduate School of Comprehensive Human Services, University of Tsukuba